私　の　離

愛知県
東レ居敬堂
小学６年　　古　田　紫　朋

　私には姉が一人います。しっかり者でかっこよくて、私のあこがれです。そんな姉みたいになりたくて全て真似してきました。剣道を始めたのも姉がきっかけでした。まだ小さかったころの事なのではっきり記憶にありませんが、竹刀を振っている姉が私にはとてもかっこよく見え、あんな風になりたいと思った事はよく覚えています。それから私も剣道を始め、姉は私のあこがれとともに、目標になりました。

　目標である姉の背中を追い続け、気が付けば私は六年生になり、姉は中学二年生になっていました。そんなある日の事でした。道場の先生が、

「紫朋って何かお姉ちゃんと剣道が似てきたよね。」

と言ってくださいました。私はとてもうれしかったです。姉みたいになりたいと思い、始めた剣道で「似てる」と言ってもらえたからです。ですが、また別の事も考えるようになりました。このまま真似をし続ければ姉のようになれるかもしれません。でもそれは、姉を真似ただけのコピーなのかもしれない、と考えると少し不安になりました。この時から私は、変わりたい、自分らしさを追いかけたいとも思うようになりました。そして、その日は突然やって来ました。

　私は同級生に二人の女の子がいます。私達三人は試合稽古をやってもお互いに勝ったり負けたりしていて大きな差があるわけではありません。ですので、大会の選手を決める時に三人で選考試合をすることがあります。この日も同じように選考試合をしました。今回は三人のうち、二人しか大会に行く事ができません。私は二人に絶対勝ちたいと思いました。ですが、私は一人目の子にあっけなく負けてしまいました。さらにその子はもう一人の子にも勝ってしまいました。残った私達二人は大ピンチです。

　ついに私の試合の順番が来てしまいました。相手の子はスピードがありますが、私は素速く足を動かしたり速く打突をするのは苦手です。お互いに負けたら終わりの勝負。ピンチの状態での試合は、何回か経験しているはずなのに、この試合はいつも以上に空気が重たく感じました。なかなか一本が決まらず、延長戦になりました。私は、精神的にも体力的にもつかれていました。もう無理かもしれない。そうあきらめかけた時、一筋の光が見えました。相手の動きがゆっくりと見え、空いている小手をはっきり目でとらえる事ができました。「ここだ！」私は相手の小手を目がけて竹刀を走らせ、

「コテェェェ！」

大きな声と同時に、相手に体を素速くよせました。

「小手あり！」

審判の先生の声が聞こえ、私は勝つ事ができたのだと気付きました。この時に私は、新しい私に出会う事ができたのだと思います。

武道には「守破離」という言葉があります。「守破離」とは、茶道や武道における師弟関係のあり方の一つです。いつもご指導してくださる先生方はもちろんですが、私にとっての身近な「師」とは姉なのだと思います。そして、姉を真似てきた私の行動が「守」と考えると、あの試合は私の「破」の始まりだったのだと思います。「守」は師の教えを守り教えを身に付ける段階、「破」は他の師や教えについて考え、心技を発展させる段階。その次の「離」は一つの流派から離れ、自分だけのものを生み出し、確立させる段階の事です。

私はまだ「離」の段階にたどりついておらず、私の剣道は始まったばかりですが、いつかその領域にたどりつきたいです。ただ真似ただけのコピーではなく、自分で考えた、自分らしさを持った私の剣道をこれからも追い続けていきたいです。